中村俊定文庫
文庫 18
492
2

晋其角勺兄弟之内

兄　晋子

麥うゑて猿乃歯白―岑の月

弟　芭蕉

故朝孔歯苣も寒―魚の店

是こそ冬ゝ月とゝふ(よに山猿叫ぶ山月落と作る)
なせるおもき巴峡の猿よりせを岑ゝ月とハヤ
うゝゐゝ詩ゝ衣ゝ壱と作ゝ―詩の金情ゝ

早稲田大学図書
中村俊定文庫

歯くやぬかのようにみるく恰銀色歯むきおるも冷しくやれもひよせる歯をむ裏零の形ようたとへなして老の景年乃ふれとも亜ぬ（よ五文字を魚此居と思れふるふ活絶の妙を志ま里を幽深玄遠み達せる所偖ちふそう（て知へし　此句猿の歯と中せに合せられれよハあ寸只ろ〻に侍る人歯士此歯の白きいうに猫の歯冷しくてなと〻仕てよぬ思よう乃爰句よハ成寸しるるもに他者我うすめ侍ゆ（予句先よして師の句寸と分ケを摸骨をきと侍る師流さのとく突入侍るゆ（自神を用ひすしく句法をのこの句反物して猫の歯白し　蛭の歯いやしなと侍るとも爰句の一神侍（〻ん寸る等類の雑ゆめ〳〵ある（うれ一句此骨を拾て芽き味を好おす意味凡此とも

に皆をのれう煉磨な歯を爰句一つのゆよちん人々も兄寸のうちを志れ（

私日氏一番ひハ初学の人お身ひよん侍（よ句法の玉あり凡士よく考く他此句を見るの要とせよう一なま習の道門の徒ういあ我突けハ晋子の猿の歯白しハ巧ろく岑此月虚の虚なと嘲あ寸我句茅のおしハ義辻化のおなう言書のうちに義此句を我してとゑに晋子此句兄の産ます〻る源之ハ此紛書まく知（　義何ぞあしき句を我し侍ふ（よやぬ用の嘲侍（きふ里今氣撰る嵐蕉云の句こも恩ハ指くよきと私もふのゑを見（よものを悪尺うものなきといちんハ已ま九る徒すて

五色筋力ゝぬ育とゝ

春之部

春立やとまりかゝすと松まつ　涼佛

さゝ川や何愛まゝく告ゝ夕鳥　一鼠

笑窪や黒ゝめてゝゝ愛墨所　江戸　素丸

はんさいや田居孔雀ひろき　一鼠

梅さゝや臼の横木によき曲　勝部　曲翠

此枝よ岳のなゝゝ咲梅哉　一鼠

まゝ川や海の景日乃かきりなく　武蔵西羊

海山乃多際たちし初日の影　一嵐

けさよりの梅に雪ふる雪綿　名古屋也有

降も雪きゆるも雪や梅乃気　一嵐

吹度に蝶に花さく柳ゝ哉　加賀一笑

ひゝすゝ水蝶の羽ゝ挿引　一嵐

月夜ゝ猫に庭の水風ゝ那　太祇

風ゝゝゝい川を夜明乃微月　一嵐

うゝひるの我へ初そゝに初雪ゝ　江戸門琵

雪乃ひとりゝゝふをりぬ乱　一嵐

後

あもきゝぬ人もこゝろや梅の花　武蔵谷笑牛

梅ゝ香や社をぬれ枝のあれそゝ　一嵐

風吹ぬ日を我死のやまぎこえ　校遊

毎日ふる雨も清うゐ柳かな　一鼠

美竹や夏を長いとみーかて　越中　麻父

まハりも枯ぬ中に若竹ハ　一鼠

雲国の底根志川ゑり玄の色　下総　青藍

さハらしく形ぬ雪を解や春乃雨　一鼠

うぐひすや山を書ゐる羽の迹　江戸　貞佐

字久佐や日ぬ形ゐ山越越ゐ耐　一鼠

美濃や雪迫つめぬ中川の流　武蔵　青梅　洗雪

下萌や形ぬ上ゐ雪　班　一鼠

白魚やゑ屋ぬ雪ぬ消てゑ　大和　六柿

志ゑいをや水も細ゑかぬ氣ゑ　一鼠

雪解く沖中川を引き来れば　曉臺
淀へ来て水乃流れ音高し　一鼠

木の芽を伐下枝を刈し事の泊連　加賀　雲和
神垣は篠も掃て木芽哉　一鼠

蝶ひとり垣をぬけうちの眺哉　仙臺　丈芝
うつくしき蕊の籬いつこそふる　一鼠

掃とりもちくぬつをえ条　玄来
のとのきや蕊を引き山茂り　一鼠

そ敷ゐれを岸も嚴さぬ蛙哉　浪花　石漱
麻れを狂舟ちわ高し帰蛙　一鼠

苗代や水の一枝乃風かろし　艾魚
なハし波や吹けも風を水の上　一鼠

れもしろい菱ろる彫物涅槃像　江戸　鳥酔

法八幡に叶ぬ身や涅槃像　一鼠

世の中や蝶〻とまれかくもあれ　宗因

川つゝや蛙ひゝなをうゝり　一鼠

我かゝるものを見る桂の乳　近江　沾逢

落〻さへ風乃落ぬ法もきゝ　一鼠

つゝまゝハこゝ後の落る絵抽ル　涼佉

釈起の此法くつきかゝ　一鼠

むしつゝハ〻ゝ出てまゝの舟　来山

里の兒よそれゝ草草　一鼠

法もゝやゝ〻ゝまゝを死て　江戸　其梅

子ゝ形ひの梁もゝはし慈ル　一鼠

何の氣もなくぬふたまゝ草艸　江戸　忠知

瓦山やゆけをりかとすれすれ　一鼠

よいくとまゝとく来らう風呂　日野　乙路

ともくもくらや紙衾　一氣

風をまゝ梅のあかひや初さゝ　江戸　秋瓜

横尺〻横さく星よやとを条　一角

さくくと登れも雪ぬ峠　乳　浪花　笠松

初さゝかさふ山々雪のまく　一鶯

かくむと花の末後手後たて　江戸　琴風

毛氈よ笠茶〻く茶乾けるに　一角

吉先に尺〻枝ちん茨橋　尾張　丈艸

一度来く茶の盛を巻日小　一氣

花をさくらまとれ雲八吹よ春　素園

みよしぬや花ちぬ地よあり雲よ堅　一鼠

菊入や都ゝ舞を指なるひ　京　素流

やふいまや先よある草橘ゝれ　一鼠

点滴やあゝ夕ゝ雨ゝ　鬼貫

海とても雨のかなしぬ田ノ　一鼠

花のもや眠くに面ちれ氣ちり　越後　和水

なれもふや三味堂ゝ乃光ヒ　一鼠

やまふ文や柳ま水のゝもむ絲　素園

歌ゝやゝ我さゝ氣乃ふれ月　一鼠

水めゝ鶴れ見ゝと流ヒ集　浪花　椿冠

鶴の引ゝとゝ乃素乃書　一鼠

夏之部

とゝ〻氣〻伊勢まてたゝの更衣　其角

打もおまきゝふ人あまゝこゝろとかゝ　一鼠

ゝ門てきまにものたておまゝ簾　伊勢　兎士

ゝ敷ハ又ゝやゆゝしも青簾　一氣

君ゝ代や筵麿祭も猶ゝとゝ　尾張　越人

云ふまゝ身まもはゝくまれ誓氣　一鼠

月の目もやつれて細し係とゝ　上野　一紅

あけゝゝゝ月さへ低し郭公　一氣

淀舟や喧嘩まましるかとゝきゝ　江戸　立志

揖取も夜明のゝメやほゝ寒寺　一鼠

雲の宮乃星見くらたる縄　大津 智月

昼乃うるむ夜明やほとゝぎす　一鼠

かとゝぎすなくこゝろの打もあ　尾張 荷兮

杜鵑聞きくとゝ打もしに　一鼠

さむしゝ海の緑碧あをゝ葉撰ぶ　山店

次くゝと新茶北上成あをゝゝり　一鼠

うこゝゝて山水もあり蒸るを　下総 白山

りるゝゝ蔵ゝ所まかきゝゝ　一鼠

蔵ゝうちは三尺ゝゝや蝸牛　江戸 烏明

りかとをゆけゝ戻るゝゝ蛍　一鼠

蟹栗いろゝゝ菊ゝゝもふる蛍　浪華 二柳

けしのむゝゝの咲てゝ二つ蛍　一鼠

青のなき水あり八重て蛍哉　青梅　涼宇

あるく程ふるゝき地ろ那　一氣

京になき関を見よりも蛍哉　上野　雲郎

花かゝる京よりも関ゝある夏を　一鼠

刈よ高く笹も高くもとりも　伊勢　温故

すゝしさに所氣もなきや踊哉　一氣

筍乃霧あのつゝの山をし　支考

筆や大井原れすき後しき　一鼠

たけのこや綾いあとおもそれ　信州　雞山

筆やきく花れを伸もせあ　一氣

実橘や寺中法人の髪をそり　加賀　希因

実まるあるく島のすゝさゝ　一鼠

柿の葉乃雨うけの新やかんこそり　大和　何来

布穀鳥乃夕々を嘯ねとも　一嵐

起こ石もの伐志きりにゐ鶯乃　武蔵　二毛

されもとゝ時く藤乃春水鶯乃　一嵐

伐株の若葉を見れを横乃　不交

横乃本のきれとも〳〵わゝを乃　一嵐

隈笹乃廣葉をうけくし餅粽　江戸　岩翁

巻たてゝ毛色毛む粽乃　一嵐

さゝ姫乃ゆゝ乃五月の風乃毛色　浪花　洒堂

朝風乃軒吹わゝ乃菖蒲乃　一鼠

見ゆ物せハまゝ葉よあふ法懺乃　探志

岩橋乃兒の乃ゝ わゝ乃のかゝ乃　一嵐

先ぞめく蚊帳打ちきりぬる　言水

綻ひをいましる蚊帳のをしめ哉　一鼠

蚊屋や蚊帳つかふたびとの　其角

けふくしと蜩なくあく故也　一鼠

何人とまき迷入るむ蚊帳の魂　大魯

我蝿見紙帳よ魂のなるまるあり　一鼠

五月雨や欠おとせ大井川　翁

舟くだる大井川茶屋五月雨　一鼠

五月の渡をかへて田植の邪　摩根許六

身よあれも姫てあれをたうへ水　一鼠

粽の角沈くあうなの水をし　加古川山李

月代よ粽川茶　一鼠

春たてるものすべて清水に　潦月

うゝ飲ゝ馬乃数蛙清水に　一鼠

桶あてゝ竹ゝ面ゝ高ゝ苔清水　門琵

見わたせば毎へつゞく清水　一鼠

ゆふゝゝや清水（隣）を和ゝ風吹ゝ　鬼貫

すゝゝゝや此あまゝ風ゝ清ゝゝ　一鼠

白雨や人ゝ色ゝゝ玉ゝ海の上　加賀伽涼

ゆふたゝゝや路ゝ白ゝゝ沖乃雲　一鼠

雲の峯けたゝを富士ゝ仰ゝ　江水

あゝ付ゝ乃畫ゝゝ低ゝ雲ゝ峰　一鼠

社ゝ太鼓ゝゝゝ雲ゝ峯　加賀地枝

臼のゝゝ音ゝ梅あゝ雲のゝゝ　一鼠

二三書給そうた（とありさま乱　肥前　魯町
あつきあやとふ浪く屋も庵　一鼠
石原北踏とあれぬありさま　江戸　杉風
砂川の砂ふきあげれ暑ク邪　一鼠
夏艸ま身ハかめうまく旅北元
暑ク野ま人の見て牧　鬼貫
一鼠

夕風やこれもひとりハまま寺　京　移竹
いき孫むといふくハかり所納涼　一鼠
簾しくすしやかれをいまロ　荷兮
我門城見くりうまくこれ　一鼠
蓮見ま日ま月額の力ふくとも　農風
達のもすくきちハ人もまん　一鼠

秋之部

なむく秋の夕ともゝてきんの　鬼貫

秋ちやうを見きはゝ人こゝ紙　一鼠

あるかさへ湯へも義理相一茎　移竹

風遠のよきもあしきも一塔婆　一嵐

船造る鑿丸こゝちに一茎哉　傳可　元峯

船庭に大工のこゝろや数やふ来　一嵐

蓼くゝ人こゝ知あらあらの川　浪花　雲亭

人こゝ見月こゝ入こゝ天北川　一嵐

をとゝゝや窓のふいをひろけて　加賀　禹洗

ふゝ一事丸教こゝ見えぬ踊ふ　一鼠

竜胆やとかせもそかへ茎の乳　涼佐
ひとかせもゆふ水や霊まつり　一嵐

出乃国や桔梗もてんてる枕もと　加賀　雲羅
作間て寝るかと気しきもくも　一嵐

うき八旅よ志ぐ迄とても蟋蟀　仝　既白
旅の我をまちしをけるやきりぐす　一鼠

きりぐす寂蛇寂清く時よ冬　信州　素稚
紙燭とまぐ足を伸せきりぐす　一嵐

鼓れぐ馬の嘶り冬陸奥　炊玉
稽る城俳へたかくも地蔵　一嵐

りんれぐよ若ゝ乳花野に　江戸　蘭城
ゆきぐまてあぐ徒羽せて地蔵に　一嵐

志ゝ霧や毎ゝ列なる変　宗因

立そめてそれも危き霧の玉　一鼠

牧の夏の七月ちきいのちに　直生

すゝる牧とまれを聞やあ血　一風

わすれぬ皆ゝちあけぬ郭に　伊勢兎士

そふやまくも時ねを時ぬ鶉に　一鼠

立ゝそめんつまきを乱

何をたのゝ御ゝ家を忘れ　上野素輪　一風

稲妻や雷のゝ中に五位の夏　翁

いなりやまや二百も風の有ゝ　一鼠

川霧やそつと新潮の橋　大津可風

淀川や雪の下り舟ゝ　一風

紙冠をや細あしして咲て居　大和　去路

けいとゝや佛の日より笑ふ　一鼠

乞食もまた彩色あれぬかしに　江戸　笠翁

ゝゝや何ぞゝ居ても案山子　一鼠

昔法師世を宮殿鳴よ蛙　上毛　烏夕

おるをひみりてハをい教ゆる　一鼠

遠山やとんかつひ出法ひもを　秋之坊

蜻蛉の飛ぶを老人ひ出ふ那　一鼠

蚊帳一重去ゆゝ近ゝ所の夢　乙由

やはらに起るあり〻蛙　一鼠

かとゝのゝ家を藏る山ゐ孔　伊勢　樗良

時や干潟へ義教所北音　一鼠

やとりせハ欲よむ僧や鳴の孝　二柳

名かさぬ里ふるとむけを晴ふる　一鼠

月や空移れ下り帆ゝけ山彩　美濃 呉竹

ゝ志ゝ後や芋の流り帆の墨足　一鼠

名月や海も抱きた山を見す　去来

名月やなけ生いふる如海と山　一鼠

名月や何城鳥の明ふり　泠々

松ゝやいま入月とあるを少　一鼠

人別ゝ紫山ゝ（ゝ）りや数し多　涼佛

陣幾色に戻鳥あり放生會　一鼠

机撥も猿のすゝや約むゝ　荷兮

それゝゝ月かと強し駒迎　一鼠

我庵を下る丸建ぶる　柳居

冥五日もいとあるとの暑風　一亀

古寺火燈残れもふきぬる　敝足

旅僧一日と楽く樗きぬ　一亀

毋の服乃あるをとおまぬる乳　野坡

さゝ旅よ夜のまぬるや畫の山　一亀

上行とゝ月雲やゝ蛛のそら　凡兆

秋の空雲より雲へ落る日や　一亀

芦の穂よ沖の方風乃隙の乳　太祇

吹すゝもゝ激乳ゝゝひや芦の穂　一亀

玄略

茸狩や梟乳先ゝ乳ゝかゝ　其角

たけうやれゝゝ乳人よ拾ゝ　一亀

菊の香や白屋うゑむせよかと　太祇

お社菊露に紙燭のうれ　一鼠

きくの花はの赤しく見ゆ時雨　希因

きくくとにを這ものあるまた　一鼠

様くいろ〳〵おもくや和歌ふ　其角

ちくれは多きいろくの歌ふ　一鼠

廉社夢清きあかしの鼾うれ　大魯

ぞとり起二人起るの廉社夢　一鼠

何のいろく家をひとかす秋の昏　儿董

紙袋資もきき乗妹乃昏　一鼠

中〳〵よりてもよるを社昏　樗良

此年よ敗ても淋し稲のうれ　一鼠

冬之部

蒼の羽もうい法く法ひ如和しれ　去来

日あらう鴨死身を格時雨うす　一亀

富士見を笠杖書ふる志ま平ル　伊勢梅路

後の法や羽たく法ま平一ま法　一亀

窓明く松よ志ま平の月清ル　信中青楮

ふく居れを宮へも来ら初時雨　一亀

藁屑をまま志や法ふを月時雨　伊勢入楚

磯う家を数なてて法初しれ　一亀

麦蒔や志ふれく戻ふあき信　希因

麥蒔や被ふて志ひ久れ　一亀

枯〳〵ゆ川のあしの花　蘭更
かぢとりの呼ぶ小松原　一鼠

有るべき道志られぬ枯野哉　涼佑
多枯や村なつかしみち　一鼠

遊摩会や蓮志ますゝ毎一枯　近江乙路
遊摩會や浮き生海鼠の毎一物　一鼠

水多く重くゝんえて浮よりう　鬼貫
浮寄り多く見えせ見る鶴　一鼠

多多く一度よ鳴く鷺乃新　涼佑
水鳥乃うこきもやん星のかげ　一鼠

五百生さうと風く生海鼠ふ　加賀梅左
うゝと川やまこ海よなまこ哉　一鼠

水仙よこるけしきかな雪　作者不詳

日あらの垣ちとくとあ仙を　一鼠

紙衣ぬくたもろい光ほい　江戸　鼠所

ぬくくんくハ今年もやめる城衆　一鼠

敷ちやまと紙帳もおそふ食ゐれ　京　惟然

石ぬくも弧帳もあり水紙衾　一風

食ぬくくぬくくるこそ引ル　不流

ひとりくく上紙ぬくく火燵ル　一鼠

楷の火に新子足さすわひ鼎ル　去来

ぬくくの火や他の寒ぬも抱かくき　一鼠

埋火やかへしてはうふ筆の跡　武野上文東

うりこ火やる孔法ひる活歩　一風

あけがのゝ霞ゝ鶯や煙鳥　文曉

うれしさを敷島へしやめぐめり　一鼠

西行しぐるゝやあらんゝの雨　翁

そゝゆきや春ハたしゝの雨の音　一鼠

初雪や家牛花ゝ埋のたのゝゝ　八幡佃坊

あゝ海ゝおもゝゝゝ敷の空　一鼠

あかゝゝく銀河の底や冬ゝ月　涼佛

水凍て車ハ言し冬乃月　一鼠

波ゝや流ゝゝの冬ゝ星ゝゝ　歌曲

こゝゝよや月も動ゝ越のゝ　一鼠

瓶破ゝ波のこゝ夢ゝ庫元　翁

こゝゝよやをの音と切し鶏の音　一鼠

山水氷滅ちとなりて氷うす　蕪村
冬の日や解くハこちらのわれ水　一氣

旅やくらく息つきあっし時雨雪　直生
孫ゑれを庫裏にかくに鳴ちとり　一氣
細代きまく死ぬやくら掛火うち　乙由
まく時のちかくぬきや細代雪　一鼠

人妻乃抜歯をとれさむさ乳　野坡
よくきけを蟲家(カラ)ゆ故ゑ家乳　一氣
年よれを氣もひ子をむさ家　園女
枕して氣ゑく居れさむさの敷　一鼠
枇杷の色たゑもそこハ氣乳分ん　伊勢涼菟
枇杷ゑ家朝日夕日もそこすて　一氣

瓢箪よ浮世の柱やたたてき　京　百川

後の世ハ何小ちとく浄毎紀　一鼠

酒仮の飲湯ハいたきを多仏　其角

生涯乃酒のそこにて寒念仏　一瓢

煤掃や搏法をあた延き　中津　滝童

乙鳥の古巣何とすきもし　一鼠

おほ世るにこまるもおかし年忘　武列　示行

年忘つもわすまて寄る夫方に　一瓢

節分ハ我年きに来るこゝろ　伊賀　猿雖

瓢ゆなるへくこんもれ釈こゝろ　一鼠

節季ゆ人のよろこあれもの　兎士

節季仕や何ぞいふも安いまず　一瓢

世話や餅の盛り人数　鬼貫

餅番やうにあけく涼なる　一瓦

想ひまぬ所走よ惜しよ月和尚　柏舟

ふの日は七〜短し年の暮　一鼠

い祝〜と人はいをまはせの暮　路通

馬鹿〜といとれて年ハ暮よりり　一鼠

番の引

そみちとハ花もとしめんか（ア毛　一鼠

たゆ〜ゆまよ夢もあ毛帰花　素秋

かつらの影よあけるよ代尼の月　春

たとふ句ひとはなひ所ハあ〜しさすの晋き

れよを花ん遊きき）とおもむきをそみよそ（て

そろ寂しき我のこい（毛花の匂そみちは花もと

めとと見いそるらのみよ　ゆ毛のさら毛我ち毛も

しめん咲ものこうれとよあれ歌のそをうまく文雅

弦田毛花の塵の花もとし　孝深ものこ尼とかつもま

眺を用〜せ〜ふ〜ん

漢ニテ
微妙ニ

紅葉ふりちる色ふるうちハ秋をみち草ハ冬ふるを
季節の極よのをほさきをまくるふるハ造化秘
自をみるをき人とりあつ
かつを花ハ志花をまく狗もとも我師ハ出ぬを十月
小春をふるちるくとハ秋より初冬を時雨とハ定くる
ふるくしかくてのををつるをハ時雨月をふさるをふり
さらや嵐のかつをふを祈をくるをハ嵐ハ月をいつれハ嵐ハ白
白紙次手こ連晋子と義の例ハ倣をあを
素秋白宛文毛の一本ふくをめくを

下三十